て胎児性前立腺横紋筋肉腫の診断を得，また膀胱側断端への腫瘍浸潤が疑われたため，膀胱全摘除術および回腸導管造設術を施行した。術後 cisplatinium, Etoposide Actinomycin-D による化学療法を3クール施行した。初発症状出現より約9カ月現在，再発，転移を認めていない。前立腺横紋筋肉腫は稀な疾患であり，本邦では自験例が47例目である。

31. 前立腺癌と血清カルシウム値.

宮内大成　（千大）

前立腺癌は高率に骨転移を起すが高カルシウム血を呈する者は少ない。昭和56年から62年までの間に千葉大泌尿器科を受診した前立腺癌202例では初診時高カルシウムを示したものは骨転移（＋）106例中1例のみであった。（－）例ではなかった。逆に低カルシウムを示したものは106例中16例で骨転移（＋）のものが（－）の86例中4例に比し有意に多かった。全経過中に高カルシウム血を呈したものは6例で，5例は死亡前で，ホルモン無効例あるいは早期に再燃するものが多かった。

34. 進行性睾丸腫瘍に対する自家骨髄移植併用の大量化学療法

石井弘之　（千大）

治療抵抗性の進行性睾丸腫瘍3例に対し自家骨髄移植を併用することにより，VP 16, 1200mg/m^2, Cyclophosphamide 120mg/kg, CDDP 60mg/m^2 の大量化学療法を施行した。骨髄移植後の末梢血の回復は良好で白血球が1000/cmm を超えたのは移植後9，10，8日目であり，その間重篤な感染は認めなかった。1例は転移腫瘤の50%以上の縮小を認め，1例は化学療法直後より腫瘤は空洞化し8カ月経過している。1例は治療に反応しなかった。

36. 前立腺癌の MRI

内藤　仁，坂井誠一，平岡　真
（沼津市立）

対象は昭和63年7月より11月までに当院を受診した未治療前立腺癌7例で，臨床病期は B_2 1例，C 4例，D_2 2例であった。MRI は Stage C以上の症例においては癌の被膜外浸潤の有無が的確に診断でき，臨床病期の判定に非常に有用であった。しかし，Stage B_2 の症例については癌と診断できず，前立腺内に限局する癌に対しては診断が困難と思われた。

37. 睾丸に原発したと思われる横紋筋肉腫の1例

座間秀一　（国保成東）
長尾孝一　（帝京大市原・病理）

症例：64歳，男性。左陰嚢部の無痛性腫大を主訴として来院。左睾丸腫瘍の診断で左高位除睾術施行。摘出した腫瘍は，2,200g で，病理組織学的に睾丸に原発した胎児型横紋筋肉腫と診断した。諸検査で遠隔転移なく，リンパ管造影も正常で，Stage Ⅰと判断し，化学療法すすめたが，家族の承諾得られず退院となった。睾丸に原発した横紋筋肉腫は稀で，本邦では自験例が3例目と思われる。

38. クラインフェルター症候群の1例

伊野宮秀志，脇坂正美，高岸秀俊
（船橋中央）

症例は32歳男性，昭和63年1月頃より口渇，多飲，頻尿続くため5月24日当科受診する。外陰部発育不全，女性化乳房あり，両側睾丸小さく，内分泌検査にて FSH, LH が高値で，テストステロン低値であり，染色体分析は47 XXY であった。また空腹時血糖，グリコヘモグロビンA_1C も高値であり糖尿病も合併していた。エナルモンデポ投与して経過観察中。

40. 泌尿器科処置での仙骨麻酔の経験

水町義信　（平和台病院）

28例男性患者に仙骨麻酔を施行し，泌尿器科処置での有用性を検討した。2%キシロカイン10～13ml 用い，22例に Analgesia を，3例に hypesthesia を得た。失敗例は3例あった。処置の内訳は膀胱尿道鏡18例，尿道鏡3例，逆行性腎盂造影1例，環状切除術2例であった。麻酔領域は S_2～S_5 15例，S_3～S_5 8例，S_1～S_5 1例，L_1～S_5 1例であった。重篤な副作用は何ら認めず，S_3～S_5 領域で無痛を必要とする泌尿器科処置に有用であると思われた。

41. 帝京大学医学部附属市原病院泌尿器科における最近1年間の臨床統計

山口邦雄，伊藤晴夫
（帝京大市原）

外来新患総数は，1211名で男女比は，1.8:1であった。年齢は両性とも40歳台にピークを示した。新患の入院総数は300名で，性比は3：1であった。年齢分布では，両性とも70歳台にピークがみられた。総手術件数は，外来